

東北ヘルプ ニュースレター 2021年クリスマス号

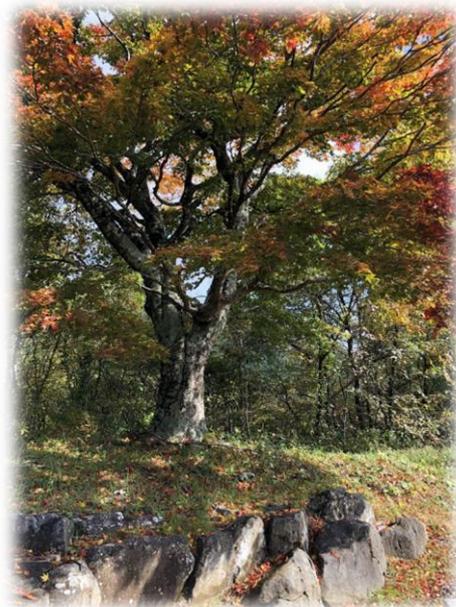


- 巻頭言（事務局報告） 1頁
- 気仙沼市水梨地区の福祉施設「いっぽ」の展望 2～5頁
- 気仙沼市本吉町の福祉施設「ほっぷ」の展望 6～9頁
- 津波被災地で「巡礼」の旅を
カリタス南三陸 千葉道生さんインタビュー 10～14頁
- 10年待って、ついに赴任
トラン・ニーイ宣教師インタビュー 15～16頁
- 献金者・「3.11メモリアル被災地復興支援プロジェクト」協力者 御芳名簿 17頁
- 会計報告 18頁



右：
1889年に献堂された日本最古の木造礼拝堂・旧石巻ハリストス正教会（石巻市中瀬）

左：
1500年代末の史跡「満海上人壇」へ上る巡礼道脇の、晩秋の紅葉（「潮風トレイル」南三陸町コース）



巻頭言（事務局報告）

東北ヘルプ事務局 川上直哉

東北ヘルプ2021年クリスマス号をお送り致します。

本号のテーマは「展望」だと思います。気仙沼の二つの福祉施設、そして登米市・南三陸町と石巻から、「展望」を抱いて被災地に立つお一人おひとりの「声」を、皆様にお届けいたします。

いつも、ニュースレターをまとめていますと、たくさんの方のことを学ばされます。現場の「声」を広く伝えるように整理する作業は、私たち東北ヘルプにとって、とても重要な作業となります。

2011年3月18日、「支援者を支援するために」という目的をもって、仙台キリスト教連合が「東北ヘルプ」を設立しました。その業務はすぐに大きなものとなり、事務局は「法人」となって行きました。状況の進展に伴い、法人は改組を繰り返しました。今、このニュースレターをお届けしておりますのは「特定非営利活動法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ」となります。この組織化によって、活動は持続可能な体制を整え、そして皆さまのお祈りとお支えを受けて、私たちは10年のあゆみを進めることができたのでした。今、「10年」を超えてさらに進むためには、更なる改組の必要があると、法人理事会で議論が続いています。今年はその結論を出す年でした。その結論は大詰めの段階にあるのですが、なお「祈り」と「沈黙」の時を必要としています。このニュースレターが印刷に入るころ、また、法人の理事会がごぞいます。「10年」を超えて進むことができる体制・態勢が、きつともうすぐ姿を現すと、神様の御業を期待して待っています。そのただ中で編集されたのが、今回のニュースレターです。ここに登場する一つひとつの「声」は、迷いながら議論を進める私たちへの、確かな励みになりました。その「声」を皆様にお届けできますことを、本当に感謝し有難く思っています。

ニュースレターはこのところ、「津波被災地」と「原発被災地」を交互に特集しているように思います。今回は「津波被災地」の特集のようになりました。この間、原子力災害の被災地支援もまた、確かに進捗しております。ここに一つだけ、簡潔に報告を申し上げます。

世界中の祈りと、そして現場からの熱い思いに促され、東北ヘルプは福島県内の諸教会と共に「食品放射能計測所・いのり」を仙台・郡山・いわきに設立し、現在に至っています。2011年から始まった「共同運営委員会」では、現在、東京・那須塩原・石巻そして福島県浜通りと中通りから委員がオンラインで集い、情報交換をし、計測事業の課題と展望を確かめ合っています。

その中で長く課題であったのは「土壌計測」でした。

大気中に大規模に拡散し、そして大地に降下し付着した放射性物質は、とりわけ福島市・郡山市という人口密集地期において、深刻な問題となりました。それは「深刻過ぎて、触れられない」ものとなっていたのです。前回のニュースレターでご案内した通り、決して少なくない箇所で、「指定廃棄物として、国の責任のもと、適切な方法で処理する」基準（8,000ベクレル/kg）をはるかに超える（しばしば、その10倍を超える）土壌が見つ

ります。もちろん、それは「見つけなければならない」ものです。でも、「見つけた」後、どうしたらよいのでしょうか。今は「原子力災害特別措置法」に基づく「原子力緊急事態宣言」下にありますから、「指定廃棄物」とすべきものを「見ないふり」しても「ただちに影響はない」のです。むしろそれを「見つけてしまう」と、行政も困る、結局、その土壌の周りにはいる住民が「不安」になるだけだ・・・ということで、私たちは困りながら、でも諦めずに、話し合いを続けて来ました。いわき市では貴い「お母さん」たちの努力が営々と積み重ねられ、そうした土壌にも行政が対応して下さるようになってきました。それはしかし、ものすごい努力の積み重ねの結果でした。それだけの力が、私たちにはない。無力さを噛みしめながら、私たちは祈り、話し合いを続けていました。

そうした中で、前回のニュースレターに報告しました「福島駅からほど近い住宅地にある大島牧師の自宅の土壌から140,000ベクレル/kg程度の放射能が計測される」ということが起こりました（詳しくはどうぞ、東北ヘルプのホームページから、前回のニュースレターをご高覧下さい）。どうしたらよいのか。私たちはこれまで集めた知識を総動員して、大島牧師にお預けしました。大島牧師はそれを見事に活用してくださいました。大島牧師の相談を受けて、福島市役所は環境省と連携し、たくさんの方の資料をお持ちになって懇切丁寧な対応をして下さったのでした。



福島主のあしあとキリスト教会 大島博幸 牧師。
行政機関の方がお持ちになった資料をお見せ下さっています。

行政は「前例主義」で動きます。県都の行政が良い対応をして下さったことは、今後そのままつながって行きます。このことで、私たちは一つの展望を得ました。土壌汚染に不安を感じる時には、計測すればよい。そして数字が出たら、福島市のような対応を求めて、行政に相談すればよい。そのような道筋が見えれば、大都市での土壌汚染の一つずつ対応することもできるでしょう。

10年の間、時に無力さに打ちひしがれながら、私たちは現場にとどまりました。留まることができたので、少しずつ、知識も智恵も蓄えることができました。それはすべて、皆様の祈りと支えの賜物でした。いま改めて、現場からの「声」をお届けし、御礼とさせていたただきたいです。引き続き、現場にとどまりたいです。どうぞ、引き続きのご加祈りを、宜しく願いいたします。

(2021年11月24日 事務局長 川上記)

気仙沼市水梨地区の福祉施設 「いっぽ」の展望

2021年春のニューズレターでご紹介した通り、気仙沼市本吉町の「ほっぷ」をモデルとして同市内水梨地区の納屋で生まれた事業所「いっぽ」が設立され医療的ケアを必要とする「障がい児」への福祉事業が始まりました。今年、水梨小学校の廃校後の校舎を活用して、その活動は地域の核となる力強いものとなりつつあります。

2021年10月18日、東北ヘルプの秋山理事・中澤理事と共に、再び私は「いっぽ」を訪ね、秋山順子理事長にお話を伺いました。



前回の記事は左のQRコードからご覧頂けます。6頁の「ほっぷ」理事長 佐藤工さんのインタビュー、そして9頁の地図と共に、どうぞお読みください。

(2021年11月23日 事務局長 川上記)



秋の美しい日にお訪ねをしました。撮影は中澤理事。
上記の左が川上、右が秋山理事です。

——前回、ここに寄らせていただきました時は「いよいよ本格稼働」という時期でした。

秋山順子さん：

はい。そして工事は今年3月に無事に終わり、法人として、18日から本格的に、この元水梨小学校の校舎に入居したのです。

——最大の課題は「人材」つまり福祉の専門家がスタッフに足りないことにある、とおっしゃっていました。

秋山順子さん：

そうなのです。そしてこの半年の間に、不思議なことが起こりました。他の福祉法人の施設長だった方が、ある日、突然、見学に来られたのです。そして一か月半、ボランティアをしてくださってから、職員になってくださいました。その方に今年10月1日から、副施設長をお願いしています。また、福祉学科の学生さんを、実習のため受け入れる体制が整いました。来年には、仕事の仲間になってくれるかもしれないと伺っています。

「生活介護」を充実させたいと、ずっと思ってきました。そして今、その思いに応える体制が整いつつあります。

——「生活介護」は、とても大切なことなのですね。

秋山順子さん：

はい。そう思います。たとえば「パンツを自分ではけない」と、そんな体であったとしても、当然「自分の人生を生きたい」と願っているものです。そして多くの場合、環境を整えさえすれば、その思いはかなえられる。障がいの有無に関わらず、その個性を個性として扱うことが大切だと思うのです。重い障がいを抱えていても、楽しい、嬉しい、よかったと、そう思える時を用意したい。「一人の女性として見てほしい」「一人前の人間として扱ってほしい」といった思いを、私たちも共有したいと思っています。

中澤理事：

それにしても、副施設長さんは、よく、ここを選んでくださいました。「決め手」は何でしたでしょうか。

副施設長：

スタッフが専門性を持っていて、その人的資源に大きな可能性を感じました。皆さん、看護師さんや保育士さん、教員といった方々です。障がい福祉の働きには、慣れておられずに苦勞されていることもありましたが、本当に頑張っておられました。「魅力的だな」と思いました。そこに入って、私も役割を果たして、そして人材育成につながれば、本当にいいな、と、そんなことを思ったのです。

中澤理事：

実際、今日、ご様子を拝見しました。先生たちが「ゆったり」して見えました。素晴らしいことだと思いました。

秋山順子さん：

私は、ここに「ほっとする場所」を用意したかったのです。障がいと共に生きる子どもたちです。みんな、とても頑張って今日を過ごしている。せめてここで、頑張った分、気持ちを楽にしてほしいと、そう思っています。そのためには、まず、スタッフがゆったり楽しめる職場であること。それは、とても大切だと思います。



「生活介護」の様子。
看護師でもある職員による丁寧なケアがなされています。

副施設長：

今、「ゆったり」と仕事ができる職場である。それをどうやって、長く継続できるか。私の役割は、それを考えることなのかもしれません。

秋山理事：

「津波のために被災してしまった気仙沼に“ほっ”とするお茶のみの場を作りたい」と、そう聞いて、私たちもお手伝いを始めたのでした。それから「施設を作りたい」と思われて、仲間づくりを始めたのでしたね。

秋山順子さん：

はい。そして水梨小学校が廃校となる、ということで、この施設をお預かりすることになりました。どんどん事業が展開する中で、たくさんの役割を自分で兼務しなければならなくなった、と、そう思っ行って行き詰まりを感じた時、副施設長さんが来てくれたのです。

秋山理事：

振り返ってみますと、つくづく、人と人とのつながりが本当に大切だと感じます。気仙沼市の南にある本吉町に「ほっぷ」を立ち上げる時のことを思い出します。みんな「たいへんだ」と集まったけれど、どうしてよいか、わからない、「困った！」と…

中澤理事：

そうでした。障がい当事者のお母さんたちと南三陸町で出会い、お話を聞き、本当にお困りだとわかって「何かしよう」と、ここまで進んだのです。

秋山理事：

あの当時、皆の注目が仮設住宅に集まっていました。私たちは皆、障がい者福祉について未経験で、お金もない。でも、何もしないでられない。ということで、とにかく、色々な方面に相談をしました。そうしたら、専門家の方も参加して下さるようになって、そして、今につながっています。

——ずいぶん、紆余曲折がありましたね。

秋山理事：

緊急避難場所として、震災で傾いた民家の一部を使わせてもらうことから検討が始まりました。それから「トレーラーハウス」を使用することになり、それが「プレハブ住宅」になってしまって…と、とにかく混乱しながら、2012年ころ佐藤工さんを中心に始めた試行錯誤が、結局、本吉町の「ほっぷ」になったのです。それは全て、人と人とのつながりの中で展開したことでした。

秋山順子さん：

その頃、その動きを、私は知らなかったのです。市街地が壊滅状態になった気仙沼市の中で、私も佐藤工さんも、それぞれ大変だでした。同じ市内であっても、つながりようもなかった。でも、皆さんとの出会いの中で、こうしてつながってきた。とても不思議に思います。

——そして、本吉町の「ほっぷ」をモデルにして、佐藤工さんたちの活動に学びながら、秋山順子さんの福祉事業が始まり、そして今、この旧水梨小学の校舎を使って新しい活動が展開しているのですね。本当に、人のつながりの力強さを感じます。

中澤理事：

ここは小学校だったので、広いですね。この「広さ」は、ここで過ごす人間関係にとって、とても良い影響があると思うのです。

秋山順子さん：

はい。そして更に、実際の事柄として、利用者が「パニック」になった時、落ち着く場所が、別にとれるのは、とても大切なことだと思います。

中澤理事：

何しろ、最初にお伺いしたときは、「納屋」で事業を展開していました。急に広いところになった訳ですね。

秋山順子さん：

実は、慣れるまで、とても、戸惑いました。人とのコミュニケーションが、まったく変わってしまったのです。加えてそこに、「マスク」です。本当に困りました。何度もミーティングを開き、子どもたちが適応できるよう努力を続けました。

「広い」事にはデメリットがあります。それは「さみしい」ということです。そのことに気づきましたから、



まずは「狭い」ところでみんな集まって活動し、それからだんだん、広げていきました。それでも結局「職員室」があって、職員と利用者さんとは、どこか離れてしまう。それは結局、さみしかったのです。でも、ようやく今、慣れてきたと思います。さあ、これから、この施設をどう使うか、考えています。

中澤理事:

建物と空間は、いつも課題となりますね。これだけの場所は、なかなか無い。この広さは、本当に素晴らしいですね。

秋山順子さん:

本当に、この施設には、たくさんの可能性があると思っています。これから先へと、いろいろな思いが湧いてきます。たとえば「お風呂」などの設備も充実させたい。「お風呂に入れるのは大変だ」と、そういう親御さんの声も聞こえるのです。ですから私は、その声を聞いて「そうだよね、ほしいよね」と言い続けています。それはきっと、意味を持つと思うのです。

——お困りになっている方々の声を聞き、
言い続ける、ということですね。

秋山順子さん:

私たちの活動は、お母さんたちの「一つひとつの声」から始まったのです。これからも、その歩みを続けたいと思います。たとえば、朝、お母さんが8時に仕事に行く。それであれば、それに合わせて、私たちも「お迎え」に行く。そんな感じです。

実際、福祉事業を開始する前から、私たちはそうしてきたのだと思います。つまり、「水梨カフェ」という高齢者サロンを、私たちは震災前、やっていたのです。震災を経て、改めてそれを展開した結果が、福祉事業だったわけです。この間もずっと、お母さんたちとの交流を大切にして「お茶飲み」をしながら、やってきました。それをさらに進めたいと思った矢先に、今、このコロナ騒ぎです。でも、この施設があるのです。自分たちの辛さや思いを分かち合える、そんな場所をここに作っていきたいと思います。



秋山順子さん。とても明るく、元気にお話しました。

——「コロナ」の問題は、ここも大変でしたね。

秋山順子さん:

はい。とても、びくびくしました。「徹底して消毒手洗い」をしています。どうしても、感染防止は難しい。何しろ、施設が広いのです。子どもたちがどこで何をしているか、すべてを把握することができるかどうか。そしていざ「感染」となると、行動履歴のすべて掘り起こさなければならなくなります。それは、とても大変なことでした。



中澤先生:

うわさだけでも広がったら、大変ですからね。

秋山順子さん:

何しろ、職員が一番つらかったと思います。その職員一人ひとりへのケアも、とても大切なことになりました。

——そして、きっと、いつか、この「コロナ」も終わって行きます。

秋山順子さん:

コロナの中で、私たちはみんな、地域と切り離されてしまいました。それはつらいことでした。でも、きっと、もうすぐ、またみんなをここに呼び込めると思って、じっと待っています。

私たちは、生産活動をし、それを起点に地域交流もしてきたのです。畑をやって、たとえばサツマイモを収穫して、芋煮会をしてきました。ジャガイモも植えています。こうした活動を形にしたいと思っています。たとえば、子どもたちがラッピングした収穫物をご家族に持って帰る、というイメージです。「収益」にまで行かなくても、地域や家族とのつながりを生み出す生産活動をして、そこからやりがいと楽しみを生み出したい、と思っています。

秋山理事:

収益を上げることとはまた別の目的をもって、何か、生産活動をして行くのですね。

秋山順子さん：

染物をしたり、ちぎり絵の作成をしたり。そんなことをして、作品を作り、世の中に出してみることがとても大切なことだと思います。そして更に、そのことを職員が楽しんでます。それも、大切なことだと思っているのです。

そして今、この校舎の周辺地域を散歩して、ごみ拾いをしたりして、地域に溶け込む努力をしています。この地区にとって、小学校がなくなってしまったことは、本当に大きなことでした。その結果として、コミュニティ協議会も地域から消えてしまうのです。そうしたら、地域の集会場などは、誰が管理するのでしょうか。そう考えた時に「私たちも、何かできることがある」と思いました。「草むしりでも、ごみ拾いでも、地域の一員として参加してみたい」と、そう思って、活動を続けています。

今、仮設住宅が撤去されて、その跡地が残されました。もともとそれはグランドだった場所です。10年経って、またそれが地域の皆さんの所に戻ってきた。そこをみんなで活用して、地域が元気になるような、そんな工夫をしてみたい。そんなことも思っています。

秋山理事：

ここに来るたびに、励まされます。いよいよ、コミュニティの中核になってきていたのですね。小学校が廃校になった時、この校舎は「ビジネスの場」になる可能性もあったと聞いています。でも、それとは違う道を選んだのですね。そして今、市も、この施設に助けられている面があると思います。

秋山順子さん：

行政の外側に立って、私はずっと、行政に疑問をもってきました。でも、今、自分たちが変わって行くことで、行政が変わる、ということを感じています。そして気が付くと、感謝なことに、行政側の方から、この施設を評価してくださっている声が聞こえてきました。

秋山理事：

過疎化が進み、小学校が合併・廃校となって、校舎が後に残されて行く。そうしたことは、全国のあちこちで起こっています。でも、この気仙沼市水梨地区では、その残された校舎に、新たに福祉事業が展開し、そして、以前よりも多くの子どもたちがそこに集うようになった。そしてそれが、これから地域コミュニティーの核にもなって行く——これはとても素晴らしいことだと思います。いろいろなところに知られて行って、モデルケースになればと、そう思いますが、まだ、それほど知られていないでしょうね。

秋山順子さん：

そうですね。発信は、大事な課題だと思っています。今、通信を毎月出しています。ボランティアの方が、お手伝いくださっていて、本当に助かっています。「気仙沼 いっぽ」と検索くだされば、ホームページが見られて、そこに通信もご覧いただけるようになっています。

——最後に、施設としての今後の展望をお聞かせください。

秋山順子さん：

障がい児の中には、成長とともに、器具などを体に合わせて調整しなければならない子もいます。そのために、入院をしなければならなくなります。その時、「退院するまで、待っていてくれるのですか。退院した後も、ここを利用できますか」と、お母さんがおっしゃるのです。そうした方には「心配しないでください」とお伝えしています。

大切なわが子の、障がいと共に生きる長い日々を、共に生きる親御さん。その切ない思いが、そこにあります。そうしたお一人お一人と共に、私たちは「戻れる場所」を確保し続けたいと思います。

私たちの施設の特徴としては、「看護師」が常勤スタ



窓の外にはグランドが見えます。
机の上には、支援物資の「カボチャとジャガイモ」です。



多機能事業所「いっぽ」のホームページ。
<http://www.mizunashi-ippo.com/index.htm>



ップとして働いてくれていることがあげられると思います。今、5人のナースが私たちの仲間として働いています。それは、利用される親御さんにとって、本当に大きなことだと思います。「安心」が、違うようです。

現在、一日8名定員の「放課後等デイサービス」と、一日2名定員の「児童発達支援（未就学）」、そして一日10名定員の「生活介護」という事業形態です。この「生活介護」は、来年4名になるかと思っていますが、できれば「5名」を目指したいと思っています。そしていつかは「夜間のサービス」も、と考えています。ここから市立病院まで10分かからない立地です。可能性は広がっていると思います。急がずに、ゆっくり、充実させたいと思います。（了）

気仙沼市本吉町の福祉施設 「ほっぷ」の展望



写真奥に増築された建物をバックに。撮影は中澤理事。
写真の左から川上、秋山理事、佐藤工さんです。

前ページまでにご紹介しました「いっぽ」訪問の後、私たちは気仙沼市本吉町の「ほっぷ」をお訪ねし、佐藤工（さとう・たくみ）理事長とお目にかかりました。ニュースレターとしては2020年夏号でご紹介して以来となります。

前回の記事は右のQRコードからご覧頂けます。この時、増築工事が進められ、事業は拡充の時を迎えていました。今、その「次」の段階を目指しておられる佐藤さんに、ゆっくりとお話を伺いました。



(2021年11月23日 事務局長 川上記)

——「コロナ」の騒動の中で、なかなか、お尋ねできませんでした。最後にお訪ねした時、施設の拡張工事が始まったばかりの頃でした。その後、お変わりなくお過ごしだったでしょうか。

佐藤工さん：

変わらないわけではないけれど・・・職員の間で病気があったり。それでも、頑張ってきました。施設の拡張工事はすべて終わりました。これで、ようやく、「最初」願った活動ができるようになったわけです。

——敷地の中に、大きな畑ができていました。

佐藤工さん：

はい。今特に、みんなでほうれん草を栽培しています。ここの子どもたちが植えたり、収穫したり。とても大切な場所になっています。



——ここまでの振り返りと、今の事業について、
教えてください。

佐藤工さん：

「児童発達支援」の10名定員の福祉事業所として、もう5年続けています。「放課後等デイサービス」は、もう開始して9年になるのです。そして「生活介護」の事業は10名定員で2年続けています。定員充足は「十分」なものとなりました。順調「以上」の状態にある、と言えると思います。本当に感謝なことです。

秋山理事：

私もこの法人の理事として関わり続けてきました。理事長の佐藤工さんからは、その御苦勞をお聞きしてきました。「資金が回るか」と、ずっと、心配してきたことを思い出します。なかなか事業収益が上がらず、スタッフの給料も減給や遅配になったりして、職員の皆さんに辛い思いをさせたこともあったのです。それを思うと、今は、とても不思議な気持ちです。

——ここまでたどり着くまで、ずいぶんご苦勞がありましたね。特に印象に残っていることは何でしょうか。

佐藤工さん：

職員は財産だ、ということです。本当に、一人ひとりの職員を大切に思っています。そして、やはり、福祉の専門職の分野で、とりわけこのような地方の小さな町では、人手不足は解消されません。今、色々努力しながら「3人」の募集をかけています。本当に、専門職の人員はなかなか、見つからないのです。それでも、まだまだ、これからの展望を抱えています。実際、今、「障がい者のグループホーム」を一件、新たに気仙沼市内に作ろうとしています。

——佐藤さんは、もともと福祉の専門家ではありませんでした。でも、今、
いよいよ意欲的に活動を進めておられます。その思いを、もう少しお話しください。

佐藤工さん：

私は民生委員を17年続けています。つまり「震災前」から、気仙沼市内の状況の厳しさを見てきたのです。そしてこの数年、「障がい福祉事業」に携わり、それをさらに実感したのです。この経験を市政に反映させたいと思って、努力を続けています。そうしますと、少しずつ、市も変わり始めました。「制度は、声を上げれば変わる」と、実感しています。現場から声を上げることが、とても大切に思われています。

——なるほど。

「制度は、声を上げれば変わる」のですね。

佐藤工さん：

はい。昔は「行政指導」と言い、今は「指定管理」と「業務委託」という制度に変わりましたが、結局全て行政主導で進められました。だからどうしても「前例踏襲」となります。その限界も、そこに現われるわけです。でも、ここ最近、気仙沼の水梨小学校跡地にできた「いっぼ」さんなど、民間からの活動も各方面で盛んになり、行政も話を聞き始めました。そうした手ごたえを感じています。

——被災地の復興ということは、

そうして実現するのでしょうか。

佐藤工さん：

はい。私は、この施設という現場だけではなく、市全体を見ているつもりなのです。たとえば、通常、一般の人が問題解決のために気仙沼市の福祉事務所や保健所などに問い合わせた場合、どんな解決でも半月以上かかったりします。「前例踏襲」とは、そういうことなのでしょう。でも今は、現場をお預かりして、その現場から「県」に直接、話をしますから、「10日」で解決するのが普通になりました。そしてそれが気仙沼市の「前例」となっていく。自分たちの間の事業展開が、周囲の人々を刺激しているのだと実感しています。そして、周囲の人々と連携することで行政が変わる。その際、自分たち自身の中にある「縦割り」を排して行くことがとても大切だと、気づかされています。

——地域の人々で連携して、

自分たちから変わろう、ということですね。

佐藤工さん：

はい。「この地域を何とかしなければ」という人は、たくさんいるのです。でも、行動に移せるかど

うかは別です。それは実に難しかったのです。それで、私たちの住む気仙沼市本吉地区は「不毛の地」と言われたこともありました。その時は悔しくて、地域の小学生と一緒に新しいことに挑戦したこともありました。そうした経験を踏まえて、今、自分は障がい福祉事業に進んだのだと思っています。

——そして、震災は大きな出来事でした。

佐藤工さん：

はい。本当にそうです。出会いは、いろいろあると思うのですが、その中で、震災によって与えられた出会いは大きなものでした。それを機に、外部の方々がこの気仙沼市本吉や隣の南三陸町にお世話に来てくださった。この10年、こうしていられるのは、本当に、そのおかげだったと思っています。この10年の被災後の日々の中で「生きるか死ぬか」という生活を潜り抜けた人もいます——「よく、ここまで来た」という実感があります。私たちの施設の施設長も、そうした一人です。そうした人の声を受け取り、相談をつないで、みんなでここまで来たのでした。

——「声を受け取る」ということですね。

佐藤工さん：

はい。震災前からずっと続けている民生委員の仕事ですが、そのスタートは、まず「人の話を聞く」でした。これが第一だった。親身になって聞く。返ってくる言葉を大切に。まずとにかく「話をさせていただくこと」が、一番の支援になる——と、そう学びました。そのための勉強も、させて頂きました。民生委員をやっていてよかったという部分は、確かにあります。そこから、福祉の重要性に引き込まれたと、そんな感じがします。



川上が記録を取りながら、じっくりお話を伺いました。
左から佐藤さん・川上・秋山理事。撮影は中澤理事です。

——そして「福祉」が良く見えてきた。

佐藤工さん：

福祉というのは、時代が変わっても、誰かがやらなければならないものです。やらなければ地域は前に進めません。そのことを理解できるかどうか。それが、民生委員を長くできるかどうかにかかわっていると思います。一つ、事例をお話ししてみます。

身寄りなく、実のお姉さんとけんかして、精神に障害を得て、暴力を振るうようになった人がいました。それでその人は「天涯孤独」のようになってしまった。それでも、ありがたいことに、私の話は聞いてくれるのです。ある時、やはり「困りごと」が起こって、市が福祉事務所で会議を開き、警察も入

ったことがあった。それでも、うまくいかなかった。私はそこに入って、1時間以上話し合い、入院にこぎつけました。そうした経験が、今につながっています。あるいはその時、私は「民生委員」の枠をはみ出していたのかもしれませんが、でも、のめりこんでしまったのでした。

そうした現場から、たくさんのアイデアを得てきました。それを形にできればと思って、努力してきました。多くのお力を得てきたのですから、気仙沼圏域の改善を目指したいと思っています。

——震災から「10年」が経ってしまいました。「これから」を、どのように見えていますか？

佐藤工さん：

子どもたちを今、育てていない方、あるいは、一般的に言う所の所謂「婚期」を過ぎた方々が、高齢化した後、大変なのではないか——そんなことを思っています。また他方で、気仙沼には養護学校がありますが、そこにいる子どもたちは、卒業後、自立せざるを得ません。ですから、この二つの事柄をつなぐようなことができないだろうか、と、考えて話を回しています。「育てられて、育てて」という家族関係の大事さを肌身に感じ取る、そういう大切なことを確保する方向付けが、この震災後の気仙沼で起こる、そんな工夫が何かないだろうかと考えているのです。実際、そうした努力から、昔、石巻のお医者さんが頑張って「養子縁組」の制度が改善された実績もあるでしょう。みんなでそうしたことに取り組めば、変わってくるのではないかと思うのです。



——理解を求めながら、そうした変化を生み出す努力を続けるのは、簡単ではありませんね。

佐藤工さん：

じっと耐えながら、進めています。「地道」ということなのだと思います。この地域は、市内で最も早く、高台移転・防潮堤・道路整備が進みました。そのことを振り返るといことで、アンケート調査がありました。「震災前と今と、どうですか」という質問でした。「便利になった」というのが「65%」でした。「まず、合格か」と思ったことでした。ですからこれからは「街づくり」が課題になるはず。何か、町おこしを考えたいのです。小学校が廃校になって行く、そこに福祉事業所が入る。旧水梨小学校の「いっぼ」さんは、一つのモデルでしょう。その他、いろいろな動きが、各地に始まっています。

とにかく前に進むこと、だと思ふのです。例えば、民生委員は安否確認をする役割ですが、「コロナ」ということで、滞っています。そうすると、その他の行政サービスも、次々と滞るのです。それではいけない。できることを探さなければならない。そう思って、仲間と力を合わせてきました。その結果だと

思うのです。ここでは孤独死がほとんど出なかったのです。もちろん、私たちが自分で考えて決断して動くのですから、間違ふこともあると思います。でも、そうした間違いも乗り越えながら、高齢者・障がい者は助かってきたのだと思います。

秋山理事：

設立当初のことを思い出します。先が見通せなかった時期が長かったですね。それでも、支援者たちは「大丈夫だ、大丈夫だ」と言い続けていました。そのことは、とても大切なことだったと思います。本当に、利用者が無事に増えて、よかったと思うのです。と言うのも、「専門家」からは、佐藤さんが考えた事業形態は「利益にならない」から止めるように、と助言を頂いていたのです。実際、人件費でほとんど収入は消える、そんな事業を始めてしまった。事業としては、厳しい。でも、この事業形態がなければ、被災地の本当に必要に応えることができなかったのですよね。

佐藤工さん：

はい。求められているのは「カネ頼み」の事業ではないのだ、と、そう私たちは信じているのです。必要としている人がいる。でも、その必要が放置されている。それで、本当に困ってしまっている親子が、この地域にいるのです。だから、私は断れませんでした。それが「福祉」だと思うのです。このことをどう理解して、どうやって職員に理解してもら

うか。職員に過度な負担をかけずに、しかし、利用者に応えることができるのか。これは、とても難しいことでした。それでも、今、15人の正職員がおり、5人の非常勤職員がいます。みんな、本当によく理解してくれて、力を尽くしてくれます。何とか、その思いに応えたいと、私も頑張りたいと思います。

——当初、障がい児たちの、大人になった後の「仕事づくり」をしたい、とお考えでしたね。

佐藤工さん：

そうなのです。ですから、「B型就労支援事業」も、そろそろ、やりたいと願っています。今している事業の拡充もしたいです。そして、児童相談所との連携も考えたい。

色々、現場で工夫をしていますと、新しい発見もあります。たとえば「作業療法士」の役割が大きいことも、現場から、わかってきました。そうした工夫を積み重ねて、この本吉地区を良いところに行きたいと思っています。ここ気仙沼市全体については、

「人よりも魚（地場産業である漁業）に、お金を使っている」という問題があると、多くの人が言っています。「分散型に過ぎた都市計画だ」という批判も聞こえます。「復興」と言いますが、進捗に伴って問題も見えてきています。そして「震災復興の助成」も国に期待できなくなるでしょう。これから、生活弱者は大変なことになると思います。急いで、努力を積み重ねたいと思っています。

付記:

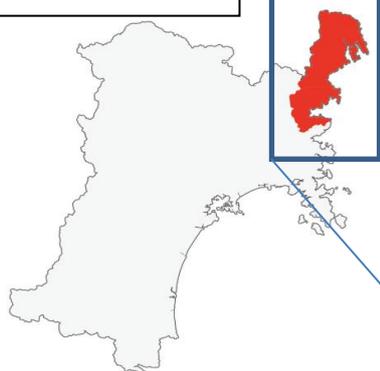
この日の訪問の中で、「もっと会って話をしましょう」と、佐藤工さんが呼びかけてくださいました。私たちは喜び励まされ、一つの「読書会」を開始することにしました。現在の福祉行政の基盤の一つになっている「社会福祉の基礎構造改革」には、クリスチャンが深く関わったことが知られています。そのことをご一緒に学ぶことで、また何かお役に立つことができるかもしれない。そのように考え、右の本を読むこととして、「読書会」は、11月22日(月)午後、第一回目を行うことになりました。

そうすると、また人のつながりが生まれるものです。塩釜・多賀城で「フードバンク」活動を進めている大友牧師、そして震災後の女川で「就労支援事業所」の理事長として活躍された阿部さん、といった方々が「ほっぷ」に集まり、熱心な話し合いが始まったのでした。

「つながり」こそが、新しい可能性であることを、また新しく知らされました。「読書会」は、継続して行きます。また、ご報告できるかと思います。



地図：宮城県と気仙沼



人口
73,054人 (26,629世帯) H22/12

面積
333.32平方キロメートル

市役所
〒988-8501
気仙沼市八日町1-1-1
TEL 0226-22-6600

特定非営利活動法人 水梨からえ
多機能型事業所「いっぽ」

特定活動法人セミナーレ
多機能型事業所「ほっぷ」

津波被災地で「巡礼」の旅を

カリタス南三陸 千葉道生さんインタビュー

2011年3月の東日本大震災発災直後から、カトリック教会の支援事業は本当に水際立ったものでした。その中から、東北太平洋沿岸各地に、「カリタス」の名前を冠した支援センターが継続して今も活動を続けています。その中で、南三陸町の支援は「カトリック米川教会」とのつながりの中で「カリタス南三陸」の皆さんが担い続けておられます。その責任者である千葉道生さんに、川上がインタビューをさせて頂きました。それは「被災地と共に歩む」新しい展望を語るお話となりました。

(2021年11月24日 事務局長 川上直哉 記)

——自己紹介をお願いします。

千葉道生と申します。1978年に横浜で生まれ、幼児洗礼を受けました。学生時代を東京で過ごし、そして東京で仕事をしました。社会人としてはキャラクターグッズや広告関係の業界で働いていました。サラリーマンをして、フリーランスにもなりました。そして今、「一般社団法人カリタス南三陸」で働いています。

——「カリタス」はカトリック教会のボランティア団体となりますね。そして「カリタス南三陸」は、南三陸町の隣にある登米市米川に事務所を構えています。教会と、そして登米市と、どんなつながりを持っておられましたか？

まず、父のことをお話ししましょう。父の出身が、ここ米川（現 宮城県登米市東和町米川）でした。1955年に「集団洗礼」が行われたことで全国的に知られた町でした。その集団洗礼の時、父も洗礼を受けたのでした。その時に洗礼を受けた人の数が多すぎて、洗礼名を名付けるのが大変だった、と聞いています。それくらい、人がたくさんいたのがここ、米川だったのです。

——その米川が、今は限界集落化しつつあると聞きます。集団洗礼は、米川小学校の体育館を使って行われたと聞いています。今、米川小学校は、まだ継続していますか？

はい。過疎化は厳しいものですが、小学校は続いています。まだ過疎化がひどくなる前の米川に、私たち家族は毎年、夏に帰省していました。私にとって、それは最高の思い出でした。「ジャングルに来ている」というイメージでした。山を越えた隣の「大籠」にも親戚がいましたから、キリシタンの殉教で知られる二又川などで、無心に遊んでいました。父はここにある殉教地にも連れて行ってくれました。



——キリシタンが隠れて礼拝を続けたという「大柄沢洞窟」にも行きましたか？

はい。よく覚えています。背中をぶつけて痛かった思い出がありますね。

——それにしても、「集団洗礼」を体験されたお父様とは…。すごいですね。それ以外にも、教会にかかわりのある方がおられましたか？

はい。祖母は、プロテスタントのクリスチャンでした。仙台の女学校で、当時の学長さんの影響で、クリスチャンになったそうです。祖父は早く亡くなっていましたので、父を含む5人の子どもを祖母が育てていました。祖母は米川小学校の教員をしていました。まだ教会がなかったころ、祖母が家を神父さんに提供したのだそうです。そしてその後、カトリック米川教会が、子育て支援の分野でとても良い働きをすることになり、現在に至っています。

宮城県 米川の「集団受洗」については、

伊藤 幹治 「東北農村におけるキリスト教の受容」

『国立民族学博物館研究報告』11 巻1号、43-55 頁、1986 年

<http://doi.org/10.15021/00004376>



に、詳しく語られています。



——そして、千葉さんは教会につながって行かれた。

そうですね。小学校までは、神奈川の教会で楽しく過ごしていました。ミサも、キャンプも、とても楽しかった思い出があります。中学生になってからは、転居もあり教会に通いにくくなっていました。でも、関係は切れませんでした。22歳で堅信礼を受けました。洗礼名は「ベルナルド」です。

——「観想修道会」というイメージを持った洗礼名ですね。

はい。ベルナルドは「言葉を大切に作る聖人」だったと思います。

——つまり、大人になってから、改めて教会と繋がられたのですね。

はい。26歳の時、ケルンで「ワールドユースデー」という大会がありまして、参加してみました。ケルンでは100万人くらい集まっていた、大きな集会でした。日本からも300人くらい参加していました。2週間の大きな大会でした。そこで私は教会の見方が変わりました。日本の教会では「神父は忙しい」というイメージしかなかったのです。人間

——その頃、「テゼ^{*}」の運動が世界的に広がっていましたね。

※カトリックおよびプロテスタント諸派を出身とする100人ほどの人々が30ほどの国々からフランスのテゼ村に集まり形成されている「テゼ共同体」の修道活動。「聖書の言葉」を聞くこと、単純で美しい「歌」を繰り返してうたうこと、そして「沈黙」すること、という典礼が特徴で、その典礼は日本語を含む各国語に訳され活用されている。

まさに、この「準備会・黙想会」で、「テゼ」にも触れたのです。そもそも、この「ワールドユースデー」そのものが、「テゼ」の運動の中から出てきたという経緯もあったそうです。そして、私たちが「ワールドユースデー」のためにケルンに行ったその時、テゼ共同体の指導者であるブラザー・ロジェが殺されるという事件が起きました。それは衝撃的でした。

ケルンから帰った後、普通に日本で仕事を再開しました。でも、巡礼のことが心に残っていました。いろいろ考えて、「お金」と「生産性」のための生活をやめようと思い、私はフランスの「テゼ共同体」

ではない、というイメージだったかもしれません。でも、それが、覆ったのでした。ケルンでは、はっきり、神父さんたちの「人間味」を感じました。そこで私は「巡礼」をしたのでした。つまり、歩いた。触れ合った。「100万人のミサ」という経験をした——「巡礼は言葉を超越する」ということを、そこで私は、はっきりと体感しました。このことは、大きなものだったと思います。

——それが、今に直結しているのですね。

はい。さらに、その大会そのものよりも、あるいは「準備会」としての「黙想会」に参加したことが、とてもインパクトがあったように思います。それまで私は「教会は寂（さび）れている」というイメージがありました。「高齢化」のイメージだけがあったのです。けれども、その「準備会・黙想会」には若者が数十名、参加していました。毎回、そうでした。そしてその会は若者だけで完結していた。みんな英語もしゃべれるのです。同年代で神父を目指す人もいました。そうした人々と出会い、その思いも知らされて、大きな刺激を受けました。

に行ったのでした。言葉も十分にできない私でしたが、歓迎してくれて、2か月、いさせてくれました。お金もなかった私に、仕事も世話してくれたのでした。とても強い印象を持って、日本に帰りました。

帰国して、また仕事をしていましたら「フィリピンでテゼの大会を開くから、半年ほど、手伝ってほしい」と、テゼ共同体でお世話になったブラザーから連絡がありました。驚きでしたが、お受けしました。「英語も知識も足りないけれど」とためらったのですが「日本人が来ているということ、君の存在自体が重要なんだ」と言っていました。励まされて、いい経験をしたと思います。そして、その準備の最初は「宿泊所探し」でした。それは結局、東日本大震災の支援活動と同じだったのだと、後で神様に感謝したことでした。



カリタス南三陸ベース1階にある祈祷室。テゼの雰囲気があります。

——日本では「無宗教」が当然という雰囲気があり、また「宗教」といえば「宗教戦争」のイメージが強くなりますね。その中で、テゼには「平和」のイメージがあります。それは、東日本大震災からの復興を考えなければならない今、とても意味があるように思います。

実は、東日本大震災の時、私は日本にいなかったのです。先ほどの「フィリピンでのテゼの大会」が無事に終わった後、2010年6月、私は米川に来て、祖母に会い「またフランスのテゼ共同体に行こうと思う」と相談したのです。祖母はそれを喜んでくれました。それからフランスと米川の間を手紙でやりとりしていました。祖母は手紙で「1年頑張れ」と言って励ましてくれました。

そして2011年3月に、私はフランスのテゼ村で、地震と原発の報せを受けたのです。

日本のことは、フランスでは、通常ほとんど報道されません。そのフランスで大きく取り上げられていたことに驚き「世界中が祈っている」ということを目の当たりにしたのです。ここ米川も、長く電

気が止まっていました。その停電の中、祖母は風邪をひいて亡くなったのです。

私は日本に帰りたと思いました。でも、「この混乱の中では、帰って来ても、やることもないぞ」と言われて、葬式にも出れずに、私はテゼ村にいたのです。「1年頑張れ」という祖母の手紙の言葉も、その時、私の中に響いていました。

カトリック米川教会では、カリタスの被災地支援活動が始まっていました。2011年6月、私はようやく、ボランティアで米川に来ることができました。すると驚いたことに、そこにいたスタッフは知り合いです。それだけではなく、そこに集まる人はみな、つながりのある人だったのです。つまり「ワールドユースデー」を中心に広がったつながりが、この時、はっきりと、機能したのです。



——そして、活躍なさったのですね。

活躍、ということかどうかはわかりませんが・・・確かに、テゼで学んだことは、とても役に立ちました。まず「人を迎え入れること」です。それから「シンプルなことを続ける」ということです。つまり、出会い、食事をし、祈り続ける。それがテゼで学んだことでした。さらに具体的には「宿泊場所の確保」など、具体的な活動のためのノウハウが、カリタスでの活動とほぼ同じだったのです。その時以来、「フランスの日々は準備期間だった」と思われてなりません。2011年の秋にブラザー・ギランがテゼ共同体から日本に来てくれましたので、私は「テゼでの経験が活かしている」と伝えました。とても、喜んでくれました。

——そして、10年の日々が続きました。

私たちにとっては、南三陸町全域が現場になったわけです。地道に必要な答えようとしてきました。支援活動の本部となったカリタスジャパンから、「街づくりと復興支援は分けるように」と指導されました。なるほど、そこには過去の災害救助活動の経験が生かされていると思ったのですが、でも、実際に現場に立ちますと「分けられない」と思われました。

つまり「町はなくなっている」のだから、それは、無理だ、と思ったのです。そうして、過去の経験が「そのまま」には役立たない現場での悪戦苦闘が続きました。今も同じ延長線上にいると思います。

「社会福祉協議会に寄り添って活動するように」という指導も、仙台教区やカリタスジャパンから頂きました。それは本当に有効な方策でした。その延長線上で、今も活動を続けています。具体的には「戸別訪問」をして安否を確認し、木工作业を依頼されて「モアイ像」を地域にお届けし、「お茶っこ」と呼ばれる茶話会を主宰する。特にこの「お茶っこ」は、楽しく有意義でした。特に、子どもたちのケアに、役立ちました。大人たちも必死で10年を過ごしました。だから、子どもたちに、充分には手がかけられなかった。私たちは「お茶っこ」を中心に寄り合いを持って、そこを核にして、子どもたちへのケアもできたのです。そうしたことは、社会福祉協議会との連携から広がった大切な働きでした。

——そして、社会福祉協議会が主体となったボランティアセンターは、
南三陸町で、ずっと残り続けましたね。

はい。そしてその機能は今、観光協会が担っています。そして「潮風トレイル」が整備されて行くわけです。川上さんには、その整備などにお手伝いを頂いて、感謝しています。

——特に、「満海上人壇」を中心とした
トレイルのルートは、重要ですね。

はい。今から450年前の田東山（たつがねさん）の史跡です。その辺りは川上さんが詳しいでしょう？

——ありがとうございます。1000年以上前から
仏教の聖地とされ、現在の南三陸町地域に住む人々の精神的中心となってきたのが田東山です。鎌倉時代には既に、380もの僧房が建てられていた、とか、太平洋側の修験道の中心であったとか、言われています。

室町時代末期、そこにキリシタンが広がった。その拡大を食い止めるために努力したのが満海上人。でも、力及ばず、最後の手段として、「即身成仏」つまりミイラになってこの地を守ろうとした。それは仏教とキリスト教の不幸な出会いでした。その即身成仏のために入滅した場所が「満海上人壇」。今でもそこにはミイラとなった満海上人が眠っていると伝えられていますね。

その「満海上人壇」への経路が、「潮風トレイル」の一部となりました。でも、なかなか、そこを整備する人手がない。行政も、手が回らない。そこで、カリタスのネットワークで（つまりカトリック教会を中心とした皆さんが）その参詣道を、ボランティアで・手作業で、ずっと、ゆっくり整備し続けている。ここには450年を超えた和解の働きがあると、私は感動しているのです。

「潮風トレイル」の他に、最近では、高台移転先のコミュニティづくりに注力しています。避難所以来、集団生活をしてきた皆さんです。この数年、復興公営住宅などに転居となり、独居になってしまったことで、仮設住宅を懐かしむ思いが募っています。その人々となつながら、支える活動を続けています。コロナの中「早く死にたい」という声も聞こえるのです。「遺影のそばで死にたい」と。今、私たちの活動は重要なのだと思われています。まずは、仮設集会場10か所に絞って通って「お茶っこ」をしてきた、そのつながりを大切にしています。そして、そのつながりの中で「街づくり」とは何であるか、学ばせていただいていると思います。

——コロナの不安の中で、一番大事だったのが「つながり」だったと、私たちは皆、気づかされました。

はい。そしてそれは、途切れかけたのです。例えば南三陸町でも、急にボランティアが来なくなりました。その中で、漁業関係者の方にお話を聞くと「人手ではなく、人の出会いと雰囲気的重要だったのだ、と気づいた」と言われます。今、少しずつ、そのたいせつな「つながり」をつなぎとめる努力を続けています。

——そして、「10年」が経ってしまいました。
これから、どうして行かれますか？

「つながり」が必要だと気づいた私たちが「あと〇〇年で終わりです」と語ることは、とても難しいことです。でも、「人生の最後まで続けます」と言えるかどうか、難しい。お金も、いつかは無くなるかもしれません。でも、お金が無くなっても、みんながつながっていける関係性を最後まで、いつかはわからないけれど、とにかく、続ける。それが今は大事なのだと思っています。

——なるほど。そして、そうして進めてこられた
10年の「成果」も、たくさんありましたでしょう。

時々、嬉しいことがあり、本当に深く励まされています。例えば「お茶っこ」のリーダーを担ってくださった地域の方が「あの時のお茶っこが支えになった」と言ってくださることがありました。「今になって振り返ると、実にありがたいことだった」と。私たちの方が、手伝っていただいたのに、と、励まされるわけです。

左：満海上人壇。

奥州藤原氏の時代、田東山（たつがねさん）は金山として名高く、その山頂には「経塚」が築かれて聖地とされました。その山頂付近には「1000年以上使い続けられた井戸」があり、修験の場として全国から人々が集まってきたと言います。その頂上から自動車でも10分ほど行ったところに「満海上人壇」があります。



——カリタス南三陸の活動として「米づくり」もなさっているのですね。

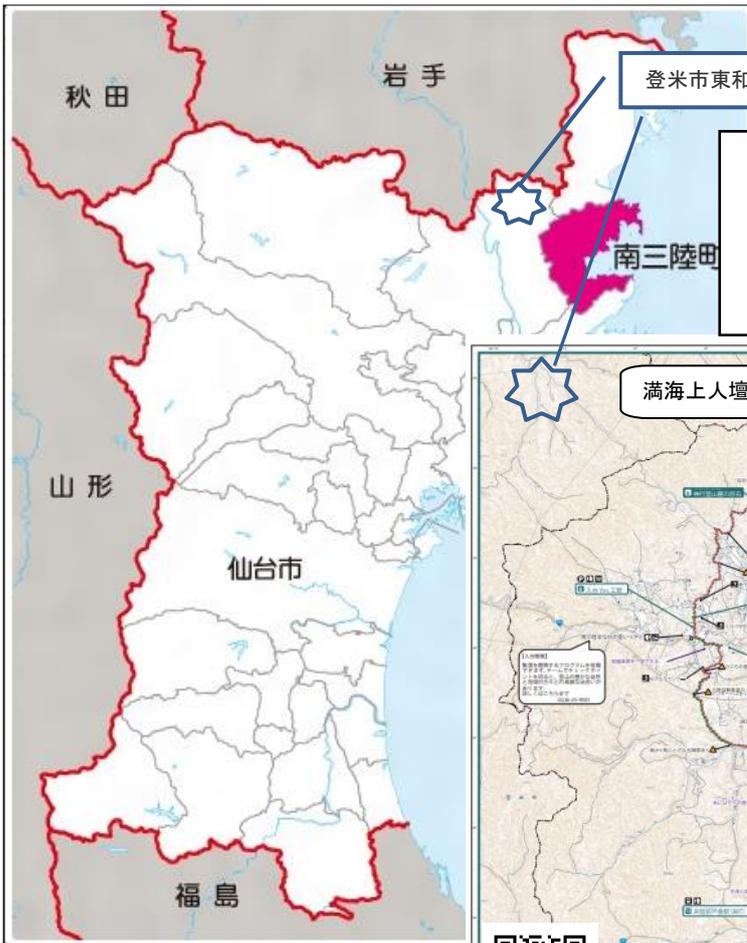
はい。3反歩の田んぼで、無農薬の米づくりを続けています。マザーテレサも地域に溶け込もうとしたと聞いています。そんな風に、地域と共に過ごすということ・地域と同じことをしてみることが、とても大切だと学んでいます。地域の方が喜ぶことを考えながら。自分も楽しみながら。田んぼの働きは、とても大切なものとなっています。

その上で、ボランティアさんが来てくださる、その受け入れをして来ました。これも地域にとって大切な働きでした。遠くから来てくださる方と共に漁師さんたちに教わりながら第一次産業を体験し、分かち合い、祈る。それが大事なことでした。イエスが漁師たちと過ごしていた頃と近い生活を私たちは過ごしているような気持ちにもなりました。

——それはつまり、「カリタス南三陸」が「巡礼の拠点」になっている、ということかもしれませんね。

実際、毎日、法人としての歩みは「綱渡り」の中にあるのです。ですから大きな目標を掲げるつもりもないのですが、あるいは、そうなったら嬉しいな、と思っています。地域の方、そして仲間がいるから、進める。そう思っているのです。

(了)



上:カリタス南三陸の皆さんが心を込めて育てた水田の美り。
 下:「潮風トレイル」の南三陸町ルート。
http://tohoku.env.go.jp/mct/route/pdf/17_map.pdf
 カリタス南三陸の皆さんは、このルートの内、「満海上人壇」周辺等を手作業で整備し、巡礼の道を整えています。



10年待って、ついに赴任

トラン・ニーイ宣教師インタビュー

時間というものは「伸び縮み」するようです。

「10年」が経った、と、東日本大震災を思って、私たちはしばしば口にしめます。「10年も経ったから」ということで、支援活動にも区切りをつけようか、と考えます。「10年しかたっていないのに」と、あの日のことを風化させてしまっている現実に、切ない思いを抱いたりします。

そんな私たちの現場に、「10年経って、やっと来ることができました」という声が聞こえました。ベトナムから米国へ渡り、そして日本への宣教師となったトラン宣教師です。その思いをお語り頂きましたので、ぜひ、ご高覧下さい。

2021年11月24日 事務局長 川上記



——ようこそ、石巻へ来てくださいました。まずは、自己紹介をお願いします。

トラン・ニーイと申します。1975年にサイゴンで生まれました。父はもともと医師であり、そしてクリスチャンでクリスチャン・アンド・ミッションナリー・アライアンスの牧師をしていました。

——ベトナム戦争・サイゴン陥落・そして社会主義のベトナムで、お父様が牧師をされたのですね。

はい。父は戦争を終えた時には医者でした。その後も医者として働き、1990年代に牧師になりました。もともと「宣教師」になりたかった父は、そのために「医師」になったのでした。

——お父様は、今もご健勝ですか？

はい。2006年から米国に移住しています。今は兄と弟とも母と共に米国で暮らしています。

——トラン先生も、米国の宣教師として日本に来てくださいました。

ベトナムの大学を卒業した後、1998年に、神学校に行きたいと思い、アメリカへ行きました。ベトナムには神学校がなかったからです。まず私は教育学を学ぶ課程に入りました。学業を終えた後はベトナムに戻るつもりでしたから、米国で「神学校」に行くと帰国し難くなるので、まず教育学の学位を修めることにしたのでした。そして米国でテキサス出身の妻と出会い結婚して、米国市民権を得たのです。

——日本との関係は、どんな感じでしたでしょうか。

ベトナムの大学で日本語を勉強したのが始まりです。その当時「日本はアジアですごい国」と思ったからでした。日本の文化と経済にあこがれがあり

ました。その後、妻と出会った時、彼女から「あなたの人生の目的は？」と聞かれて、はっとしました。「なぜ、神様は私に日本語を学ばせたのだろうか」と考え、神様に祈り続けました。

アメリカに住んで、神様から教えて頂いた大切なことがたくさんあります。「神の御国」についての理解も、その一つでした。ベトナムでは、狭い意味でしか「神の国」を知らなかった。米国で、それはもっと大きいものだ、私は知らされたのです。

特によく覚えている出来事を一つ、お話しさせてください。米国から各国に行っていた宣教師が、行った先の国々の音楽を持ち寄り分かち合う、というイベントに出た時のことです。いろいろな言葉、いろいろな楽器で、神様を賛美することができる。そのことを具体的に知った時、感動しました。いろいろな人が、同じ神を、心から賛美している、そのことに感動したのです。その時、ジョン・パイパーという神学者の説教を聞きました。「苦しみ」という主題の説教でした。それは本当に素晴らしい出来事でした。そうした中で、「あなたの人生の目的は？」という妻の問いかけがあったのです。

——何か神様の特別な計画がある、という気がしたのですね。

はい。私は答えを求めて祈り続けました。結婚して、10か月の赤ちゃんがいたとき、短期宣教で、青森のOMF宣教師のつながりの中で津軽の教会に来ました。2008年のことでした。その教会で過ごしたある日のことです。教会に座っていると、教会の役員がいらっしやって、座って、お声をかけ

てくださいました。その時、はっきり「日本に来て
ください」と言ってくださいました。私はそれを「神
様の招き」だと思ったのです。



東北最大の津波被災地のひとつ
石巻市 門脇・南浜地区を
ご案内しました。

それで、米国に戻ってから、準備を整え、父の所
属しているアライアンスに相談をしたのです。その
時ちょうど、日本に東日本大震災が起きました。
「震災の現場へ行かなければ」と、強く思われま
した。報道では「仙台」という地名ばかりが聞こえ
ていました。ですから「仙台へ」と思いました。で
も、それからさらに8年間、私は待たされたのでし
た。私は、待ちました。

2016年、ついに私は東京に来ました。2年、
日本語を勉強しながら、東京の教会で働きました。

2020年、米国に戻り、また準備を整えてから、
2021年7月、ついに私は石巻に派遣されたので
した。

——石巻の印象はどうでしたか？

東京ばかりを見てきた私にとって、「小さな町」
という印象を持ちました。そしてすぐ、近所の人
の親切が印象に残りました。妻は「息子の入学のた
めに公立小学校に行ったとき、子どもたちが寄って
きた」ことを印象深く思ったそうです。アメリカで
小学校の音楽の先生だった妻は、それをとてもうれ
しく思ったようです。「あ、東京と違う」と。

——ご家族みんなで、石巻に来てくださいました。
慣れるまで、大変ですね

そうですね。でも、実は着任する前に3回ほど、
準備のために石巻に来ていました。それもあって、
子どもたちはスムーズになじんだように思います。

——今日、私たちは「サン・ファン・バウティスタ号
復元船」を見てから、東北最大の被災地のひとつとな
った「石巻市門脇・南浜」に行き、そして中瀬へ行
きました。ました。どんな印象を持たれましたでしょう
か。

石巻といえば「震災」となると思います。今日、
その具体的な様子を見て、心が痛くなりました。

そして、その中を生きてこられた皆さんに、尊敬の
思いを抱きました。さらに今日、石巻という場所
には「400年前の遣欧使節」というクリスチヤンの
歴史があると分かりました。そうしたことを考える
と、やはり「神様の計画」を思います。一つひとつ
が「準備されたもの」だったのだと思わされるので
す。多分、この場所で、神様に何か「なりたいこ
と」があるのだろう、と感じました。



石巻市の日和山から
北上川を眺めますと
津波で壊滅した「中瀬(なかせ)」の
復旧工事の様子が見えます。

「中瀬」の北端には
「石ノ森漫画館」があり、
その向かいには、
「日本最古の木造礼拝堂」である
旧石巻ハリストス正教会堂があります。



——今どんな活動をし、今後どんな展望を持っていますか？ *****

津波の被害のひどかった地域に、支援センターとし
て「ニューライフセンター」が建てられました。そこ
で月三回、土曜日に集会をしています。地域の子も
たちのための集会です。

私は「神の国」ということを考えています。「聖書
の神によって支配される国」です。イエス様は人々に、
言葉と業で、「神の国」を教えました。その中で大事
なことは、「神の国は“すでに”来ているけれど、“ま
だ”来っていない」ということです。「その到来は暴力
ではなく愛をもって実現する」ということです。

自分はベトナム人です。でも、米国での経験を通し
て「どの人も、みんな、兄弟姉妹だ」と思うようにな
りました。実際、米国からベトナムに来てくれた宣教
師とその背後の教会は、私のことを支援してくれまし

た。でも、その教会の人々は、その直前に「ベトナム
戦争」で犠牲者を出していた教会でした。それでも、
ベトナムの私たちのために祈っていた。それはきっと、
イエス様の十字架による罪のゆるしと、そこにある神
様の愛がはっきりと理解された結果なのだと思います。
そうして、神様の愛を受けたことによって、自分
の敵にも神様の愛を届けることができるようになった
のだ、と思うのです。

それは不思議なことです。でも、それは単純なこと
でした。つまり私たちは「イエス様と共にいる」から
「イエス様のようにになりたい」と思う。米国で知っ
たのはその不思議で単純な事です。私も、この同じ思
いで、石巻の人々のために努力したいと思っています。

(7)

献金者・「3.11 メモリアル被災地復興支援プロジェクト」協力者 御芳名簿

(敬称略・順不同 期間=2021年1月29日～2021年11月16日)

扇町教会 小倉徳力教会 名古屋キリスト教社会館 牧師 南部哲男 アイジエール広島福音教会
 青木一芳 赤崎克俊 明比信子 アサダマコト 浅見祐三 浅利誠四郎 アジア学院 3.11 記念礼拝
 芦田政子 阿部克己 阿部紀美子 阿部頌栄 安藤 元昭 安藤則子 生島幹也 石川裕美 石川勇吉
 石田信正 磯田幸子 井出存祐 伊奈シャロームチャペル・キリスト教会 井上修三 猪刈由紀
 猪瀬恭子 いわき食品放射能計測所いのり 岩間節子 上野緑ヶ丘教会 延興功雄 遠藤茂雄 延与
 功雄 大倉一美 大阪水上隣保館 法人本部 大城千鶴子 太田伸二 大槻裕樹 大野康彦 大原武夫
 大曲ルーテル同胞教会 大谷貞夫・偕子 岡進 岡本連三 岡本連三 岡本節子 小川實枝子 荻原邦
 子 沖本正隆 尾関敏明 小高美幸 小田直弥 小野寺順子 小幡正 オペレーション・ブlessing・ジャパン
 柏原繁宜 カトリック新聞 金井美智子 金沢独立キリスト教会 金子純雄 鎌倉深沢教会 上坂寛
 子 神山道子 軽井沢追分教会 河内常男 川上政孝 川島敬子 河内常男 川本龍資 菅野兵一
 菊地弘生 岸和田聖書教会 北里洋 木村すげみ 京都丸太町教会 金南植 国兼光子 熊谷 郁子
 倉石昇 蔵元英二 恋が窪キリスト教会 国際仏教教会 小坂井勉 小林和代 小林喜成 金野壯
 在日大韓基督教会豊橋教会 酒井玲子 坂内義子 坂中昇 佐久間弘子・文雄 櫻井志穂子 佐々木公
 明 佐々木清 佐竹早苗 佐藤江美・紀美子 佐藤雅俊 佐用チャペル 代表者 松本直展 塩田明子
 塩田隆良 塩田瑞代 柴田公文 柴田謙 島田祥子 清水恵子 清水俊一 清水文雄 清水 弘一
 大宮まぶね保育園 社会福祉法人日本コイノニア福祉会 安田信人 シャローム武庫川 キリスト教会
 尚綱学院大学宗教部 真宗大谷派 開光寺 新所沢教会 菅美枝子 巣鴨聖泉キリスト教会 鈴木美智
 子 鈴木みね子 スズキショウジュ 鈴木伸子 せきぐちたかこ 関田寛雄 瀬座こずえ 天羽道子
 セミナーレ 理事長 佐藤工 千光寺 大下大圓 仙台朝拝会世話人 松本芳哉 善隣キリスト教会 青年会
 相馬静香 袖之原寛史 高橋通規 高橋直子 田川徹 田川徹 竹本栄子 竹本栄子 田中美鈴
 ダニエル・ヘラー 谷川修 谷村和枝 月本昭男 辻剛 つばめさわキリスト教会 出口玲子
 八尾福音教会 特定非営利活動法人 DOVXA 所沢聖書教会 代表役員 横田俊樹 長崎インターナショナル教会
 袖之原寛史 中澤竜生 長嶋清 中田春子 中村正俊 中村愛基 長山忠雄 中山信一・朝子
 名古屋中村教会 奈良いずみ 新里・鈴木法律事務所 太田伸二 新津テイ子 西牧夫・あゆみ 西千
 葉教会 虹の橋募金 森村真弓 西村清 日本キリスト改革派徳島教会 日本キリスト改革派 鈴蘭台
 教会 日本キリスト教団 早稲田教会 日本キリスト教団 尼崎教会 日本キリスト教団仙台北教会
 日本基督教団蒔田教会 代表役員古谷正仁 日本キリスト改革派 千里山教会 沼倉孝憲 沼崎真奈美
 日本キリスト教団美浜教会子どもたちの教会 日本基督教団蒔田教会 日本基督教団松井田教会
 日本基督教団横浜指路教会 日本キリスト教団大綱伝道所 日本基督教団児島教会 日本基督教団松
 本教会 日本キリスト教団鴨東教会 日本基督教団四条町教会 日本キリスト教団岡崎茨坪伝道所
 橋本富子 橋本智子 橋本啓子 長谷川正一 羽野浩雪・環 濱地正枝 早川悟 早川政人 ハシナトル
 原淑子 原宿教会 子ども礼拝 原山和子 はりま平安教会 会計 榎正彦 板東由紀子 引間春一
 久ヶ原教会 向日町教会 日原広志 ひばりが丘教会 平井純子 ヤマト運輸 福井紀子 布宮圭子
 福音の園・埼玉理事長 杉澤卓巳 福島キリスト教連絡会放射能対策室 藤田直子 藤原俊樹 星野房
 子 細井孝江 細川富代 北海道キリスト教会 堀北健二 牧南 幕田君江 松浦賢治 松坂有佳子
 松田俊彦 松野幸悦 松本芳哉 松本設子 水永晃子 宮坂信章 宮崎昌久・せい子 麦倉道子
 村田榮 本村大輔 森和亮 森憲一 八尾福音教会 八ヶ岳中央高原キリスト教会 矢部邦子
 山口由紀子 山田節子 バッハ・コレギウム・ジャパン 横田憲子 横浜英和学院 理事長 伊藤 横谷進
 横山昭一 吉田正子 吉田隆 吉原富士見教会 世の光キリスト教会 世の光キリスト教会 和田 弘
 夫 渡邊邦子 渡辺千恵子 阿部望・典穂 安住英子 井上建築工房 榎本聡子 横山昭一 下谷教会
 関根悠紀子 喜界教会 宮本桂子 金子哲夫 光田隆代 国井昌光・愛 佐久間弘子 坂口昌浩
 坂内義子 札幌教会 室町教会 松本重雄 水野雄二 星野理恵 聖書友の会 青柳芳明 大谷尚子
 早川けい子 大塚基一・礼子 池田五月山教会 竹本栄子 天野文子 渡部眞澄 渡辺総一 渡邊信
 道本純行 八重山中央教会 膝館良証 望月強 本田圭 名古屋中央教会 木下和好・恵美子 木村葉
 子 有田豊 廣瀬久子 頌栄教会 齋藤みや子

以上、感謝して報告いたします。
 (2021年11月24日 事務局長 川上 記)

収支計算書（全体）

2021年4月～2022年3月

2021.10.18現在

(単位：円)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11-3月	計
会費収入	-	-	5,000	-	5,000	-	-	-	10,000
献金収入	696,000	260,368	456,788	302,940	263,000	546,100	294,500	-	2,819,696
預金利息	3	-	-	-	8	-	3	-	14
収入計	696,003	260,368	461,788	302,940	268,008	546,100	294,503	-	2,829,710
給料手当	180,000	180,000	180,000	180,000	230,000	180,000	180,000	-	1,310,000
法定福利費	11,408	11,408	11,408	31,082	11,258	11,408	11,408	-	99,380
新聞図書費	21,242	11,749	25,820	31,841	24,079	28,861	29,400	-	172,992
通信費	49,356	36,406	31,273	29,252	46,617	37,237	21,971	-	252,112
支払手数料	6,250	3,568	3,803	4,576	3,585	10,245	5,632	-	37,659
外注費	38,500	38,500	38,500	38,500	71,500	38,500	38,500	-	302,500
事務費	65,812	46,461	35,983	34,074	47,241	52,288	29,847	-	311,706
広告宣伝費	70,791	-	-	-	89,659	-	216,992	-	377,442
旅費交通費	80,996	17,780	18,930	17,460	12,090	36,185	69,628	-	253,069
燃料費	20,000	16,500	10,000	14,000	16,000	19,000	24,000	-	119,500
会議費	57,897	15,019	5,580	8,000	6,970	12,380	22,130	-	127,976
支援費	260,260	208,826	122,153	489,622	65,412	111,503	91,408	-	1,349,184
支出計	862,512	586,217	483,450	878,407	624,411	537,607	740,916	-	4,713,520
収支差額	-166,509	-325,849	-21,662	-575,467	-356,403	8,493	-446,413	-	-1,883,810
								前期繰越	3,813,274
								次期繰越	1,929,464

会計報告を致します。1頁の「事務局報告」と共に、ご高覧下さい。

上記は、全ての確認を終えた会計報告となります。現在、事務局で会計を管理しつつ、その帳簿の管理などを有償ボランティアの方に（心から感謝しております）お手伝いいただいております。尊いご献金を適切に管理するために、このボランティアの方のご労は、本当に貴重で有難いものとなっています。こうしたお一人おひとりのお心に支えられた「10年」でした。

皆さまのご支援をお預かりして、また、いくつかの「指定献金」をお届けすることができました。下記はその写真です。皆さまのお心、そして祈りを、お届けできました。この10年、ずっと、そうした大切なお役目を担わせていただき続けたことに、深い感謝を新しくしています。

(2021年11月23日 事務局長 川上直哉 記)



下：大島牧師に献金をお渡ししています。

場所は、「福島主のあしあとキリスト教会」の新しい会堂建設予定地です。



右上：佐藤工さんに献金をお渡ししています。

佐藤さんは11月23日、気仙沼市から「福祉功労者」として表彰を受けられました。

左上：秋山理事から秋山順子さんに献金をお渡ししています。

場所は、旧水梨小学校校舎である「いっぽ」の応接室です。





支援金・献金の受付口座

【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代 表 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

事務局長 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北 郡山キリスト福音教会牧師）

監事 本村大輔（救世軍泉尾小隊）

小河義伸（八王子めじろ台バプテスト教会牧師）

※肩書等は、すべて2021年11月末日現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP

Per crucem ad lucem（十字架を通過して光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6 食品放射能計測所「いのり」気付 ※住所が、変わりました。

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : sendai@tohokuhelp.com